

画像文明

石原藤夫



著者略歴 昭和8年生，早稲田大
学電気通信学科卒 工学博士 S
F作家 主著書「ハイウェイ惑星」
「ストラルドブラグ惑星」「SF
ロボット学入門」他多数あり

JA = Japanese Author

画 像 文 明

〈JA76〉

昭和五十一年三月十日 印刷
昭和五十一年三月十五日 発行

(定価はカバーに表
示してあります)

著 者 石 原 藤 夫

発 行 者 早 川 清

印 刷 者 草 刈 龍 平

発 行 所 株式 会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京(二五四)一五五一(代)
振替番号 東京・六一四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・中央精版印刷株式会社 製本・株式会社川島製本所

画像文明

石原 藤夫



早川書房

364

目次

高い音低い音……………	七
夢見る宇宙人……………	一五
天使の星……………	三九
解けない方程式……………	一三七
画像文明……………	一八五
銀河を呼ぶ声……………	二三五

カバー・伊藤 明デザイン室

画 像 文 明

高い音低い音

その技術者はいかにもいらいらした表情で、ひょろ長いからだをゆすりながら、こううったえた。

「異星人とのつきあいが、こんなにわずらわしいものとは、思ってもいませんでしたよ！」

宇宙での永年の経験を生かして、コンサルタントを開業しているストーン博士は、おもむろに白髪をかきあげ、おうような、しかも親身のある微笑でうなずいた。

「きみはまだ若い。悩みごとのできるのは当然だ。いったいなにが起ったのか、順序よく説明してみたまえ」

「わたしは通信技師で、現在、地球とタタタ星との間の思考波通信回線の工事を担当しております」

男は博士の態度に信頼をおぼえたらしく、おちつきをとりもどし、デスクのむこうで坐りなおすと、話しはじめた。

「最初のうち、仕事は順調にはかどりました。思考波アンテナの据え付けも終り、そして、お互

いの発振回路の周波数をもう少し調整すれば完成というところまでこぎつけたのです。ところが、そこでとつぜんトラブルが発生してしまいました。まったく思いだすのもいまましい……」

「きみの気持ちはよくわかる。で、どんなトラブルなのかね？」

博士の同情をえて、男はいきおいこんだ。

「わたしが信号出力を示す計器を見て、もう少し周波数を高くするよう思考波を送りますと、相手は逆に下げてしまうのです。またこちらが低くするよう依頼しますと、むこうはいかにもわざとらしく上げてくるのです。まったくひどいじゃありませんか、人が真剣になっているのに。ぶんなぐってやりたいが、なにしろ何光年も離れた場所にいるのでそうもいきません」

話を聴きおわって、博士は大声で笑いだした。おかしくてたまらないといった様子だ。男はむっとして博士をにらんだ。博士はあわてて口をおさえた。

「いやごめんごめん、つい思ひだし笑いをしてしまった。その問題はきみ、わたしのとくい中のとくいなんだよ。教えてあげよう。べつに相手がいじわるをしているわけじゃない。きみは、われわれが周波数が高いとか音が低いとかいった表現を用いる理由について考えたことがあるかね？」

「は……？」

キョトンとしている男に、博士はわかりやすく説明した。

「われわれは背が高いとか天井が低いとかいうときに使う位置の高低を表わすのと同じことばで、音の周波数の違いを表現しているが、これは、よく考えてみると、べつに論理的必然性があつてのことではない。単位時間あたりの振動数の多い少ないを、とくに“高い”“低い”と表現しな

ければならない物理的な理由はどこにもないだろう？」

「……？」

技術者は首をかしげた。博士はにっこりすると、立ちあがって部屋のすみにある電子楽器に近づいた。そして、ペース・ペダルを足でおさえた。低音がフロアをゆすった。博士は男に向きなおって、いった。

「どうだな、この音はきみにとって、どんなひびきかたをしたかね？」

「なにかこう、ハラの底がゆすられるようでした」

ふしぎそうにしている男の答にうなずくと、博士はつぎに、最高音のキーを押した。男は思わず首をすくめた。

この様子をみて、満足そうに博士はきいた。

「こんどはどうひびいたかね？」

「頭の芯がビリビリしました！」

男は、博士のいう意味がしだいにわかりかけてきた、といった口調で、身をのりだして答えた。博士はゆっくりと席にもどりながら、男に話した。

「いまの実験はごく初歩的なものだが、それでも問題の理解には役立つだろう。人間のからだの共鳴現象と、部屋の構造とがからみあって、音の高低が位置の高低と結びついているのだ。しかし……」

博士はいすに腰をおろし、ふたたび男と向かいあうと、ことばをつづけた。

「……この表現はそれだけではなく、じつはわれわれ地球人の聴覚器官の構造、つまり耳の器官

の位置関係からもきているのだ。すでに二十世紀半ばからある程度研究されていたことだが、音を聴くのに必要な内耳蝸牛をはじめとする諸器官の構造の関係で、同じ点源から発した音でも、細かく振動する音は高い所から、またゆっくり振動する音は低い所からくるように感じるのだ。このため、高い音、低い音といった表現が自然に生まれた。これはさらに、音以外の電気震動等にも適用されるようになった。この表現は地球人類である以上、どの種族の言語でも同じだ。しかしきみ、異星人にも成立するとは限らないんだよ」

「わかりました！」

男はうれしそうに手をうった。

「つまりタタタ星の連中は内耳構造やからだの共鳴周波数がわれわれと逆なので、高い周波数のことを低い周波数、低い周波数のことを逆に高い周波数、というふうに感じ、そう呼んでいるのですね」

「そのとおり。技術者だけあって気も短いが理解もはやいな。なにもけんかをする必要はなかったのだよ」

「まったくそうでした。これでさっぱりしました。ところで博士、いまの理屈でいきますと、内耳構造が前後になっている種族では、高い音をまへの音、低い音をうしろの音、といったふうに表現するのでしょうか」

「そういう種族もかなり多い」

「そうしますと、左右になっている種族では、高い声は左の声、低い声は右の声、ということになりますね」

「そんな連中にお目にかかったこともある」

「ななめになっっている種族では、右上の周波数とか左下の……」

「まあ、わかってくれればそれでよい」

博士は、男が調子にのって、ななめうしろの音だの、左まえの周波数だのといひだしそうになったので、あわてて手で制した。

「極端に風変わりな種族は少ないが、この宇宙では地球人型よりも、タタタ星型のほうがむしろふつうなのだ。こういう問題は、まだ他にもたくさんある。わたしも昔、語義情報をセマンティック・インフォメーション集めに星々をまわった頃は、いぶん苦労したものだ。人類が異星に進出する際の最大の障害は、重力でもなければ大気の組成でもなく、まして相手種族の狂暴性などではない。われわれ自身もっている——音の高低を当然のことと考えてしまうような——固定観念なのだ。わたしなど、そういった固定観念をいちはやく脱却したほうだろうな。もっとも、脱却せざるをえなかったのだがね」

「よくわかりました。大いに反省してさっそく仲直りをします。回線ができたならタタタ星を訪問する予定ですから、デートを申し込みましょう。相手の技師は若い女性なんですよ。あの星の女性には地球人によく似た美人ぞろいだときいていますから……」

「いや、それはあぶない」

博士は急に声をひそめて、男に注意した。

「わたしの若い頃の経験によると、みかけは優しそうだが、なかなかどうして……」

「あなたッ！ それなんのお話ですッ！」

博士のことばの途中で、隣室から、可聴周波数ぎりぎりのキンキン声がひびいた。

「しまった、聴こえたか」

博士はあわてて両耳をおさえると、哀願した。

「わかった、わかった、もういわないから、そのかん低い声、だけはかんべんしてくれ！」
博士のおくさんはタタタ星の出身だったのである。

夢見る宇宙人